

法政大学比較経済研究所

馬場敏幸(法政大学・大学院 経済学部教授) 編

## 金型産業の技術形成と発展の諸様相

グローバル化と競争の中で

日本評論社 2016.3. 10, 258p.

本書の目的は、工業化導入初期から持続的發展に至るまでの重要な鍵となる金型産業（サプライヤー、ユーザー、支援産業）の技術形成・発展段階・国際競争力について、「時間」（経営判断とその結果、技術蓄積、学習・人材育成、競争力向上などの歴史的経緯）、及び「空間」（産業集積、グローバル・サプライ・バリューチェーン）の2側面から紐解くことにある。

章別のタイトルを確認すれば次の通りである。本書は、第1章「日本金型産業のあゆみと現状」、第2章「日本における近代金型産業の萌芽と発展」、第3章「日本金型産業の技術発展史」、第4章「日本の自動車会社から見た金型調達の在り方」、第5章「日本金型産業における専業および兼業メーカーの戦略事例分析」、第6章「金型企業における国際化の意味と課題」、第7章「東北地方の金型産業」である。また、それ以降は、第8章「金型主要生産国の現状と国際競争力分析」、第9章「欧米の金型調達の在り方」、第10章「アジアの金型産業」、第11章「中国金型産業とその発展プロセス」、第12章「中国自動車金型企業の海外進出の背景と戦略」となっている。このように、日本の金型産業を扱った前半部分（第1章から第7章まで）と、諸外国の金型産業を論じた後半部分（第8章から第12章まで）の2部構成になっている。

各々の章を簡潔に紹介すると以下のような

る。まず、第1章では、第二次世界大戦後の日本金型産業の発展と技能・技術形成に触れ、企業規模、生産規模、所在分布、主要顧客、貿易などから今日の日本の金型産業の現状を把握している。第2章では、日本の金型産業の技術形成と発展の歴史的な展開を機械工業振興臨時措置法の効果や、ユーザー産業における大量生産体制の確立過程を踏まえて俯瞰している。第3章では、これまでの日本の金型技術を振り返り、黎明期における金型技術の誕生、高度経済成長期における金型技術の展開、グローバル化の中での金型技術の展望を考察している。第4章では、需要側である日本の自動車製造企業の観点から、パネル（候補サプライヤーリストに技術力、品質、納期、個々の会社の経営評価などを含めたもの）を用いた金型調達の手順や、国内の金型製造企業に対する評価を述べている。第5章では、金型を製造・販売する企業を金型専業メーカーと金型兼業メーカーに分類し、それらが取るべき戦略を聞き取り調査の結果から明示している。第6章では、オギハラの実業事例から金型製造企業の国際化が如何なるものか、その影響や課題がどのようなものかを検証している。第7章では、フィールドワークに基づき、専業メーカーが少ない東北地方の金型産業の実態を東日本大震災時の対応を含めて論じている。

さらに、第8章では、国際競争力係数を用いて、インド、ブラジル、タイ、中国、韓国を中心に金型の需給の推移と国際競争力の変遷を定量的に分析している。第9章では、欧米の自動車製造企業の金型調達の在り様を明らかにしている。第10章では、FADMA（アジア金型工業会協議会）の加盟国である台湾、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシア、フィリピンに加え、加盟を検討しているベトナムとミャン

マーなどのアジア新興国における金型産業の発展の歴史や、製造システムについて検討している。第11章では、外資系ユーザー企業と取引関係を持つ中国の金型製造企業の発展プロセス（垂直統合型）と、日本の金型製造企業の発展プロセス（水平分業型）の違いを述べている。第12章では、日本の大手自動車用金型製造企業であるオギハラの工場を買収した中国の民営自動車メーカー比亞迪自動車（BYD）のグローバル行動に着目し、その企業の取った行動の背景や戦略を検討している。

本書の大きな特色は、実務者と研究者、文系と理系、金型需要サイドと供給サイド、定量分析と定性分析など多様な視点から国内外の金型産業を検討している点にある。このような様々な背景を持つ執筆者が、各々の専門的な知見を活かし、日本の金型産業（概要、歴史、技術、調達、ビジネスモデル、グローバル化、地域研究）と、海外の金型産業（主要な生産国の競争力比較、欧米、アジア、中国）を議論していることは大変意義深い。ただし、本書では、上記の幅広い視点を網羅することから生じた問題もある。詳述すれば、各章で扱うキーワードは幾つか重複しており、その記述内容に関する整合性が図られていない部分が見受けられる。例えば、金型兼業メーカーという語句を使う際、金型を主力とする企業が成形加工を行う場合と成形加工をメインで行う企業が金型も外販している場合の区別が曖昧である。あるいは、海外の金型製造企業における技術力向上を議論する折、日本の熟練工・職人を再雇用することが及ぼす影響に対する評価が論者によってばらつきが生じていることである。それらの問題は、対象となる金型を製造する企業が如何なる事業に重きを置いているのか、どのような型種で何を成形加工

する金型なのかが精査されていないことに起因する。筆者は、このような事業形態、製造する型種、成形加工する部品サイズを精緻化した上で研究を積み重ねることが今後の金型産業の研究において重要であると考えている。

（兵庫県立大学経営学部准教授 藤川 健）